

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	兼平佳枝
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 西園 芳 信 副主査：（岡山大学教授） 虫 明 眞砂子 委員：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 委員：（鳴門教育大学教授） 長 島 真 人 委員：（鳴門教育大学教授） 皆 川 直 凡
3. 論文題目 音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する教育実践学的研究	
4. 試験結果の要旨 論文提出による学位申請者 兼平佳枝 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、以下のとおり審査を行った。 日時：平成27年8月8日（土） 13時00分～15時00分 場所：神戸ハーバーランドキャンパス（兵教ホール） <b>1. 学位論文の構成と概要</b> 序章 本研究の目的と方法 第I部 音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する基礎理論 第1章 デューイにおける意味共有および比喩的表現による意味共有に関する関連研究の概観 第1節 デューイの意味共有に関する関連研究 第2節 教育における比喩的表現に関する関連研究 第3節 まとめ 第2章 デューイにおける意味共有 第1節 デューイにおける意味（meaning） 第2節 意味（meaning）の共有 第3章 比喩的表現による意味共有 第1節 比喩的表現とは 第2節 比喩的表現が生成される要因 第3節 比喩的表現による意味共有 第4章 音楽科授業における比喩的表現による意味共有 第1節 音楽科授業における意味共有 第2節 音楽科授業における比喩的表現	

### 第3節 音楽科授業における比喩的表現による意味共有

#### 第I部のまとめ

#### 第II部 実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 序章 実践分析の目的・視点・方法

#### 1章 《ペルシャの市場にて》の実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 第1節 実践事例の概要

##### 第2節 《場面1》の分析

##### 第3節 《場面2》の分析

#### 第2章 《ファランドール》の実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 第1節 実践事例の概要

##### 第2節 《場面1》の分析

##### 第3節 《場面2》の分析

#### 第3章 《水の楽器づくり》の実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 第1節 実践事例の概要

##### 第2節 《場面1》の分析

##### 第3節 《場面2》の分析

#### 第4章 《きらきら星変奏曲》の実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 第1節 実践事例の概要

##### 第2節 《場面1》の分析

##### 第3節 《場面2》の分析

#### 第5章 《チャルダッシュ》の実践事例にみる比喩的表現による意味共有

##### 第1節 実践事例の概要

##### 第2節 《場面1》の分析

##### 第3節 《場面2》の分析

#### 第II部のまとめ

#### 終章 音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理

##### 第1節 各章の総括

##### 第2節 音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理

1. 比喩的表現による意味共有の構造
2. 比喩的表現による意味共有の過程
3. 比喩的表現による意味共有の特質
4. 比喩的表現による意味共有の論理

##### 第3節 音楽科教育への示唆と展望

1. 質の感じの機能と感性の育成
2. 芸術教科としての音楽科授業の意味共有の特性
3. 共感と問題解決のかかわり
4. 思考力の育成

##### 第4節 今後の課題

## 文献目録

本研究は、J. デューイのコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理を教育実践学的な研究方法によって明らかにし、その教育的意義について考察することを目的としている。このため、研究方法・手順は次のような方法をとっている。第Ⅰ部ではデューイにおけるコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する基礎理論を導出する。第Ⅱ部では第Ⅰ部で導出した理論的枠組みに基づいて実践研究を行う。終章では、第Ⅰ部、第Ⅱ部を総括し、比喩的表現による意味共有の論理を構築する。

序章では、問題の所在、研究の目的、研究の方法、先行研究、用語の規定について論述している。第Ⅰ部の基礎理論の検討では、デューイにおけるコミュニケーション論を基に、音楽科授業における比喩的表現による意味共有に関する理論を導出している。第1章では、デューイにおける意味共有、および教育における比喩的表現についての関連研究を検討し、これまでの意味共有や比喩的表現の解釈を整理している。第2章では、デューイにおける意味共有に関する文献研究を行っている。意味共有とは、共通の目的をもつ人々が協力して環境との相互作用に参加し、行為の完成を予想して協同活動を行うというコミュニケーションによって、複数の人々が他者と共通の意味を所有することである。ここでの意味とは、人間と環境との相互作用によって生じた状況の「質の感じ」（例：何かホワッとした感じ）が識別された「感覚的意味」（例：幻想的な感じ）と、識別に働く「意味内容」（例：音の進み方が変わっている）が記号化された「表示的意味」（例：音が全音階で進んでいる）の二重の機能を備えたものとしている。第3章では、まず比喩的表現についての文献研究を行い比喩的表現は〈趣意：〇〇みたいととえるもの（例：幻想的な感じ）〉〈媒体：たとえられる言語：水面を滑る帆船の夢のようだ〉〈根拠：たとえの根拠（例：何かホワッとした感じ）〉の関係で理解されることを究明している。次に、それら3つの要素と意味共有との関係を明らかにした第4章では、第1章から第3章までの理論を総合的に考察し、第Ⅱ部の実践分析に向けての理論的枠組みとして以下の3点を導出している。①比喩的表現は〈趣意〉〈媒体〉〈根拠〉の関係から成る。②意味共有は「質の感じ」を源とし「感覚的意味」「表示的意味」の二重機能をもつ。③意味共有を成立させるのは、共通の目的をもって協同活動する場でのコミュニケーションである。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で導出した理論的枠組みから（1）比喩的表現、（2）意味共有、（3）コミュニケーション、という3つの分析視点を設定し、自ら実践に関わった筆者による小学校高学年および中学校音楽科授業（鑑賞授業4事例と創作授業1事例の計5事例）の実践分析を行い、実践における比喩的表現による意味共有の実現状況を明らかにしている。結果として、次の①～③を得ている。①比喩的表現に関しては、〈根拠〉となる「質の感じ」が共通項となって〈趣意〉と〈媒体〉を結ぶという関係がある。②意味共有に関しては、「〈趣意〉は何か」を探す問題解決過程として展開される。具体的には、「〈趣意〉は何か」を探して音楽を聴くことで、「〇〇みたい」と比喩的表現に結び付けられる部分が特定され、その部分の音楽の諸要素である「形式的側面」に注意が向けられる。それによって、その部分の「意味内容」と「表示的意味」が共有され質の感じが識別されて音楽の諸要素の働きによって感じられる「内容的側面」に当たる感覚的意味となる。つまり、対象とする音楽の「形式的側面」と「内容的側面」が結合したものとして意味が共有される。③コミュニケーションに関しては、共感的で協同的な問題解決が実現される。

終章では、第Ⅰ部、第Ⅱ部の総括を行い、第Ⅱ部の分析結果を構造・過程・特質の観点から捉え直し、音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理を以下のように導いている。

1. 比喩的表現による意味共有では、音楽の「内容的側面」と「形式的側面」が関連付けられ、「感覚的意味」と「意味内容」・「表示的意味」を備えたものとしての音楽の意味が共有される。
2. 比喩的表現による意味共有は協同的な問題解決の過程となる。
3. 比喩的表現による意味共有のコミュニケーションは、共感的な点に特質をもつ。

結論として、比喩的表現の〈根拠〉となる質の感じ、〈趣意〉となる「内容的側面」の感覚的意味、及び「形式的側面」の「意味内容」・「表示的意味」、〈媒体〉となる言葉、擬態語・擬音語によって、質の世界の認識における意味の二重機能（「感覚的意味」と「表示的意味」）について子どもの学習として成り立つと論理化している。そして上記の結論について、①「質の感じ」の機能と感性の育成、②芸術教科としての音楽科授業の意味共有の特性、③共感と問題解決のかかわり、④思考力の育成、の4点から考察し、音楽科教育実践への示唆と展望について述べている。

## 2. 審査経過

(独創性)

本研究は、J. デューイのコミュニケーション論を基に、比喩的表現による意味共有に関する基礎理論を導出し、その枠組みから自ら実践に関わった5つの音楽科授業（鑑賞の授業4、創作の授業1）を分析するという実践的検討によって、音楽科授業における比喩的表現による意味共有の論理を導き出し提案している。それは、①比喩的表現の〈根拠〉となる質の感じ、②〈趣意〉となる音楽の「内容的側面」の感覚的意味、及び音楽の「形式的側面」の「意味内容」・「表示的意味」、③〈媒体〉となる言葉、擬態語・擬音語によって、質の世界の認識における意味の二重機能（「感覚的意味」例：幻想的な感じ）と（「表示的意味」例：音が全音音階で進んでいる）によって子どもの学習として成立すると論理化している。ここに教育実践学としての独創性がある。

(発展性)

本論文によって、音楽科の授業においては、教科の本質となる「質の感じ」について、比喩的表現による意味共有が可能となる論理が明らかにされた。このことで、音楽科授業の全ての活動（歌唱・器楽・創作・鑑賞）において、比喩的表現による意味共有の教材解釈や教育方法が開発され、子どもの思考力や感性を育成する音楽科授業論が展開されて行くものと期待できる。

(教育実践への貢献)

学習者を比喩的表現による意味共有の論理によって質の認識に導き、思考力や感性を育成する音楽科授業論は従来はなく、教育実践における貢献が期待できる。

## 3. 審査結果

以上により本審査委員会は、兼平佳枝が提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。